

動作のアセスメントは、観察や分析結果をもとに、機能評価による裏づけを考え、動作を論理的に解釈し、検討することまでが含まれる。アセスメント対象となる動作は無数にあり、対象者の病態・年齢層も多様である。健常動作との比較だけではアセスメントは成立しない。動作のアセスメントは何に着目しどのように進めるのか、を命題に、高齢者・日常生活活動・速度因子の重要性・見えない阻害因子「痛み・心理要因」を取り上げ、「動作」の成因とともに多面的に考え、解説していただいた。

■高齢者の動作アセスメント(金子純一郎論文)

治療対象となる高齢者は疾患による病態特性だけでなく、高齢者特有の動作特性を考慮して介入を進める必要がある。骨折を例にしても若年健常者では転倒が受傷機転の背景になる場合は少ないものの、高齢者の場合は日常生活における転倒を背景にした骨折が多いのも現状である。高齢者特有の動作特性を把握するためには、特有の運動機能だけでなく、動作環境における動作特性も考慮しながら進めることが重要である。

■日常生活動作における姿勢制御のアセスメントーリーチ動作に伴う姿勢制御(北山哲也, 他論文)

日常生活動作における姿勢制御のアセスメントは、動きの連続性(運動連鎖)、順序(手順)、効率性、多様性など、「課題遂行時の質」を観察・分析することが重要である。アセスメントは、各課題における姿勢・運動の構成要素を把握し、環境との相互作用を考慮しながら実用的機能の獲得と対象者の潜在性を導き出すことが本質であると考えられる。本稿ではリーチ動作に関わる筋・骨格系のアライメント、支持基底面、姿勢制御システムと運動パターンにおける関連性を観察・分析し、日常生活動作における介入のヒントを紹介する。

■実用歩行に必要な歩行速度の変異性に対するアセスメント(石井慎一郎論文)

日常生活動作のなかで実用的に歩行を用いるためには、歩くことができるという動作能力のほかに、安定性、持久性、変異性といった能力が必要となる。環境からの要求に従い、いかなる瞬間からでも連続的かつ自在に歩き方を変えられなければ、実環境のなかで歩行による移動は難しい。そこで、本稿では実用的な歩行能力を獲得するために必要な能力について解説をする。

■痛みと動作アセスメント(大住倫弘論文)

“痛み”は組織損傷が生じる重要な警告シグナルであることには間違いないが、慢性疼痛患者では警告シグナルを過剰に増幅させてしまうため、動作パフォーマンスが過度に制限されやすい。本稿では、組織損傷によって生じている「身体機能障害」と主観的体験である「痛み」の影響を区別する際に参考になる多面的な「痛みの動作アセスメント」を紹介した。